九州産業大学国際文化学部紀要　第14号 1－21（1999）

俳諧紀行『花乃日可数』について

――付、影印・翻刻――

阿　満　誠　一

（一九九九年六月一日受理）

一

『花乃日可数』（架蔵）に関し、まず書誌的な事項について簡単に記しておく。

書型は縦二十三・〇センチ横十六・〇センチの中本で、一冊本。全十六丁から成り、うち巻初に遊紙一葉、墨附十五丁。ただし序（一丁分。漢文で、方鏡舎の手に成る）の丁付は〇印のみ。本文の始まりから㊀～㊉・㊉㊀の丁付を持つ。十三丁（丁付欠）表で本文が終わり、十三丁裏と十四丁表に跋文を付す。

表紙は薄香色で、中央上寄りに『花乃日可数』（原題簽・無枠）とある。

成立は、本文冒頭に「享和三年きさらき中の七日なつめ舎ぬしと笠をならへてうへもなき吉野の花に思ひたつ」（一オ）とあり、同末尾に「弥生朔日（中略）家路をいそく心發りて（中略）申の刻はかり家にかへりて」（十二ウ）とある記事、及び「癸亥三月書於一葉菴南窓下」の奥書とから、享和三年（癸亥・一八〇三）の三月であることが明らかである。

二

『国書総目録』（補訂版）は本書を一葉庵藍水の編になるとする。ただ、本文の筆者は藍齊であろう。本文冒頭には、

享和三年きさらき中の七日なつめ舎ぬしと笠をならへてうへもなき吉野の花に思ひたつ篠水板橋の霜をふミてまつ老妣の御はかに跪き十日あまりの御いとまを申て髪のことき大道に杖をつるふ

日のもとにうまれて花の芳野見む　藍齊

とあり、続けて、

と打たハれて三渡りのわたりを横きりてうれし野をさす

夫より小倭郷佐田の里に藍水といへるありかねて同しなかめせむと契りしま、尋ねよれは

云々の記述が見られる。

すなわち、「なつめ舎」とともに藍水は藍齊の同道としての存在と見られるのである。「六十こすいのちなりけり花のかけ齊」（三オ）の句から藍齊は当時六十歳余りであったことが判明する。また、「先師鳥酔」（四ウ）「鳥先師」（九オ）等の語が見られることから鳥酔門であったと思われる。諸国を遍歴しながら俳人としての生涯を送った鳥酔が明和六（一七六九）年に没しており、享和二年までに三十三年の間があることから見て鳥酔晩年の入門か。

「なつめ舎（棗舎・名集舎）」がいかなる人物かは詳らかではないが、藍齊と同じく伊勢の人であろう。というのも、旅の初めに「三渡りのわたり」（一オ）を横切っており、また、藍齊・なつめ舎の二人が古仙から、

桃さくらいせ物かたり何〳〵そ

と伊勢の様子を尋ねられている（二ウ）からである。なお、跋文に「棗叟か筆労を乞て小冊となし」（十三ウ）とあるように、彼は版下清書の労を担った。

古仙は宇陀の住人（二ウ）で前田氏（二ウ）。蓬壺亭（二ウ）とも。今回の旅に同道するにあたって号を胡蟾と改める（三オ）。『国書総目録』（補訂版）は『つとのくさ〳〵』（寛政九序）の編者として蓬戸亭壺仙の名を挙げるが、古仙と同一人物であるか否かは未確認である。

跋文の筆者として一葉庵藍水の名が見える。『国書総目録』（補訂版）によると他に『ひとつ葉』の編がある。跋文中に「ことし此春閏餘の幸ありて藍棗二伯に陪して」云々とあること、同じく「藍翁いへらく」（十三ウ）「棗叟」（十四オ）等の記述が見られることから、藍齊・棗舎より若年かと推測される。享和三年当時は「小倭郷佐田」（一オ）に住んでいた。また「あるし（藍水）は家の業にひかれてひとひおくる、故に」（一ウ）とあるところから、何らかの家業を営んでいたことも判明する。

ところで、鳥酔一門の月次集である『張笠』（鳥酔編）には「月次定連」の句として「勢州　一葉庵連中」の「金鱸」以下「維石・路白・烏来・晩鷺・瓜歩・呉扇」らの発句を掲げるが、ここの「一葉庵」が藍水であるとは考えにくい。『張笠』は寛延三（一七五〇）年の成立であり、享和三（一八〇三）年当時六十歳余りの藍齊より若年と推測される藍水が庵号を持つことは不可能としか考えられないからである。おそらく藍水は鳥酔の号である一葉庵を後に譲り受けたのであろう。

三

本書は俳諧紀行の一群に加えられるべき内容を備えたものであるが、吉野への旅に参加した一行に、芭蕉・西行の文学が共通の教養としてあったことを指摘しておきたい。

前田氏蓬壺亭に草鞋をといた藍齊・棗舎の両名と主とのやりとりは次の如くである。

桃さくらいせ物かたり何〳〵そ　　古仙

答

六十こすいのちなりけり花のかけ　　齊

古仙の句は明らかに次の芭蕉の句をふまえている。

富花月

艸庵に桃桜あり、門人にキ角・嵐雪有

両の手に桃とさくらや草の餅

芭蕉句中の「桃」「さくら」は植物としてのそれらであると同時に、其角・嵐雪を指している。それをふまえ、藍齊と棗舎を「桃」と「さくら」にたとえて、伊勢の様子はどうかと尋ねたのが古仙句の趣向である。

それに対して藍齊は、芭蕉の敬慕する西行の歌をふまえる形で応じた。「いのちなりけり」は西行の「年たけて又こゆべしと思きや命なりけり伊夜の中山」（新古今）によるものである。句のやりとりを通して、棗舎もふくめた三名は共有する素養の確認をしていると考えられる。

また、彼らは西行庵で「尾陽の画人周渓」（五オ）に出会い、とくとくの清水を描かせたが、それも西行・芭蕉をしのぶ心の表れであろう。言うまでもなく、とくとくの清水は、「とく〳〵と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」の歌で知られており、一首を西行の作であると信じていた芭蕉は『甲子吟行』の途次、西行庵を訪れて「露とく〳〵心みに浮世すゝがばや」の句を残している。

なお二月廿一日の記事に「はせを翁の夘辰紀行僧丈草が吉野賦等あれはミたりに言葉を贅せす」（四オ）とあるのも、藍齋をはじめとする一行が芭蕉の文学に無縁ではないことの証左となろう。

四

ここで、旅程に触れながら内容の概略を示しておく。

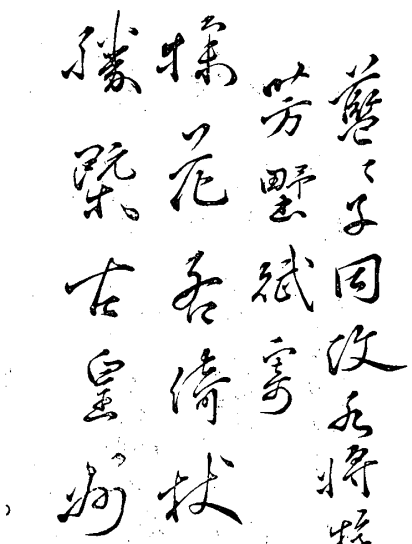
享和二年二月十七日、当時六十歳を越していた藍齋は棗舎（名集舎）と同道して、吉野の花見へと出発。

同日、小倭郷佐田里の藍水宅に一泊。ただし藍水は家業のために三日後、一行に合流することになる。

翌十八日、表参宮街道の垣内・阿保山を越え、十九日泊瀬に参詣。二十日「前田氏蓬壺亭」こと古仙宅に泊。ここで藍水、一行に合流。翌二十一日、古仙改め胡蟾を先達として、藍水を加えた一行四人、吉野を目指す。二十二・二十三の両日、吉野の桜を堪能。西行庵では「尾陽の画人周渓」に出会いとく〳〵の清水を描かせる（五ウ・六オに掲載）。二十五日から二十七日にかけて飛鳥・奈良の名所・旧跡を訪ねてまわり、二十八日帰途につき、三月一日帰宅。

跋に記すごとく本書は配り物として上梓されたものであるが、当時の旅の一端を知る資料となろう。

なお、『国書総目録』（補訂版）は同名の書を天理図書館綿屋文庫および村野文庫が蔵することを紹介しているが、いずれも未見である。



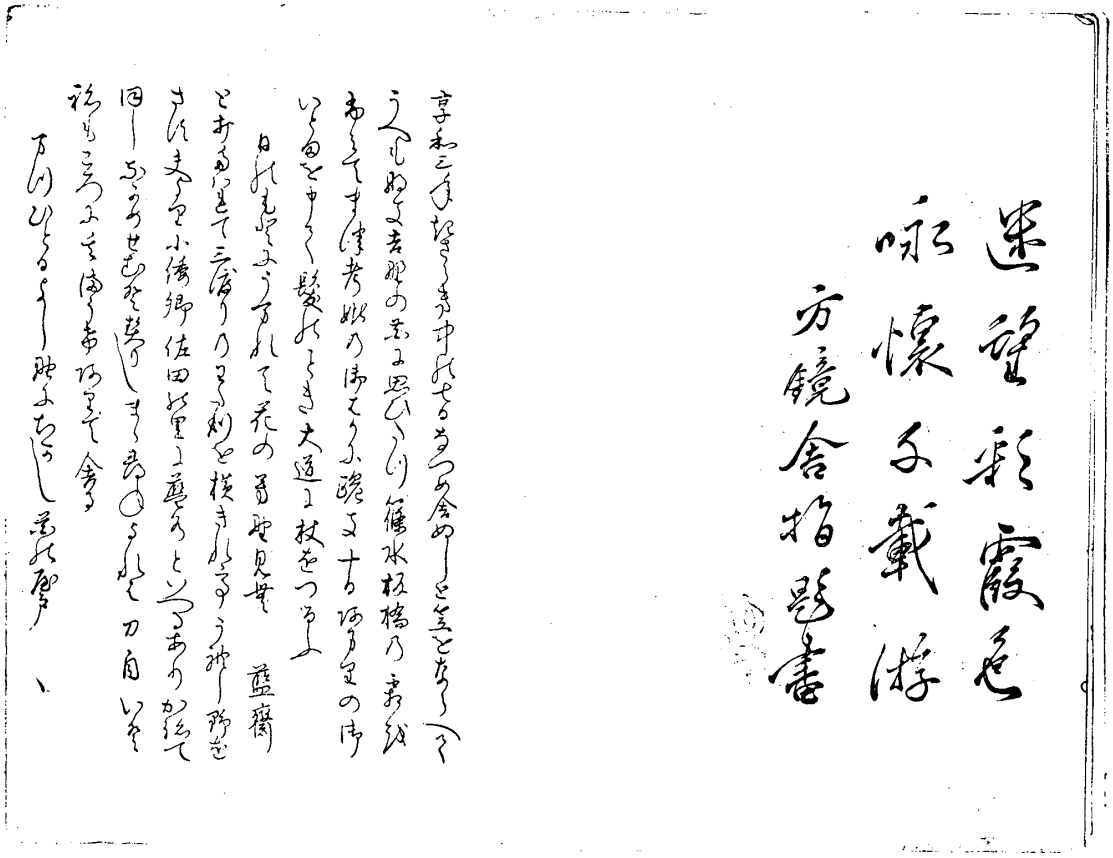
花乃日可数

（表紙）

（この間、遊紙一葉あり）

藍々子因改名将遊
芳墅賦寄
探花各倚杖
勝概古皇州

―序オ



迷望彩霞色
咏懐千載游
方鏡舎指題書

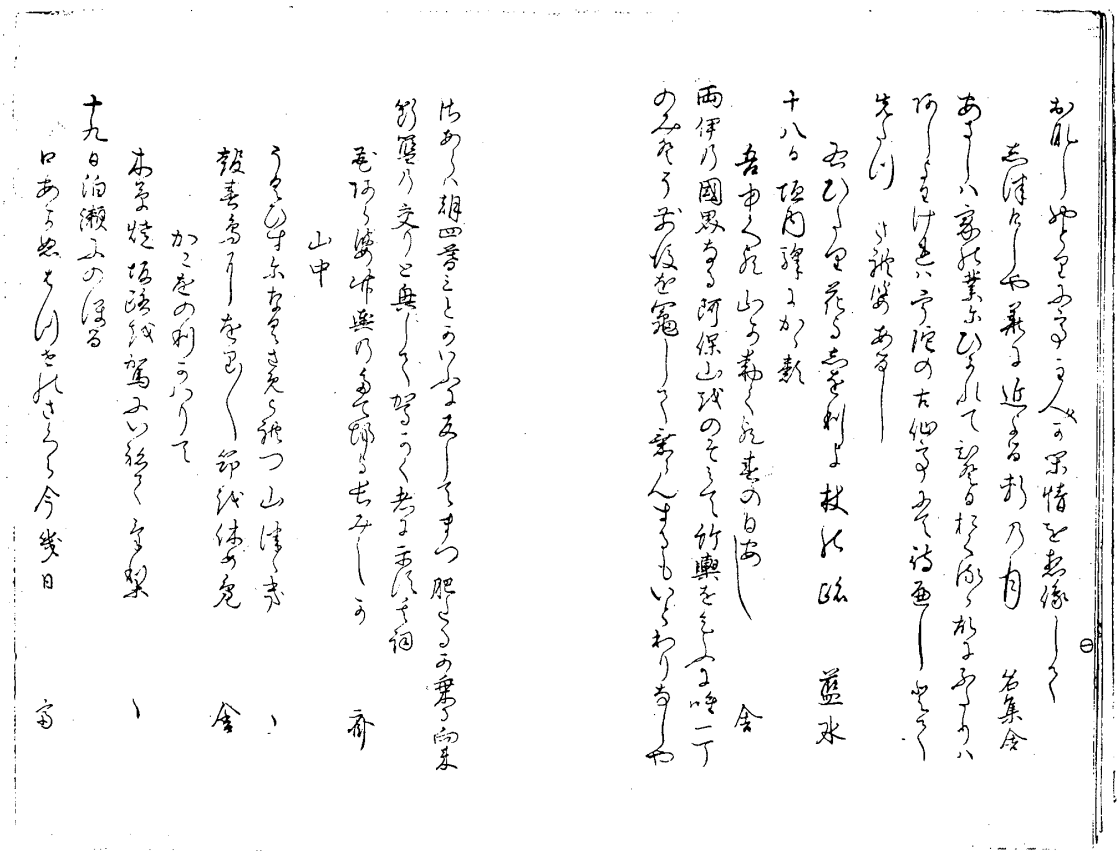
迷望彩霞色
咏懐千載游
方鏡舎指題書
㊞
」（序ウ）

享和三年きさらき中の七日なつめ舎ぬしと笠をならへてうへもなき吉野の花におもひたつ篠水板橋の霜をふミてまつ老妣の御はかに跪き十日あまりの御いとまを申て髪のことき大道に杖をつるふ

日のもとにうまれて花の芳野見む　藍齋

と打たハれて三渡りのわたりを横きりてうれし野をさす夫より小倭郷佐田の里に藍水といへるありかねて同しなかめせむと契りしま、尋ねよれは刀自いとねもころに其まうけありて舎る

まつひと日よし野にちかし花のやと　、」（一オ）



おなしやとりにて主人か閉情を想像して

しつけしや華に近よる軒の月　名集舎

あるしは家の業にひかれてひとひおくるゝ故にふたりハ

あしよわけれハ宇陀の古仙亭にて待へしとて

先たつ　されはあるし

右ひたり花よしをりよ杖の跡　藍水

十八日垣内驛にかゝる

吾ゆくか山か動くか春の日あし　舎

両伊の國界なる阿保山をのそミて竹輿を乞ふに唯一丁

のみとそ前後を鬬して乗らんとするもいとわりなしや」（一ウ）

さあらハ朝四暮三とかいふに反してまつ肥たるか乗る向来

断籃の交りと興して駕かく者に示す其詞

花あらは竹輿のたて場よ長みしか　齋

山中

うくひすになくさめられつ山つゝき　、

報春鳥にをり〳〵筇をやすめ鳧　舎

かこをのりかハりて

木草焼坂路を駕にいねてけり　、

十九日泊瀬にのほる

口あかぬはつせのさくら今幾日　齋」（二オ）

雨そほふりぬれハふもとに舍る廬山の雨の夜草庵のうちもかゝるをりにや

雨おとのはつせハ寂し春の宵　舍

二十日曙の天うら〳〵と打晴つれは宇陀にまからんと長井阪の羊腸をよつ峠にふし拜ミの松とて二本立たり初瀬を見やるに複道の空にのほるかことしいらか〳〵あさやかにていはむかたなしこの下りに前田氏蓬壺亭に入て草鞋をとくあるしとりあへす

桃さくらいせ物かたり何〳〵そ　古仙

答

六十こすいのちなりけり花のかけ　齋

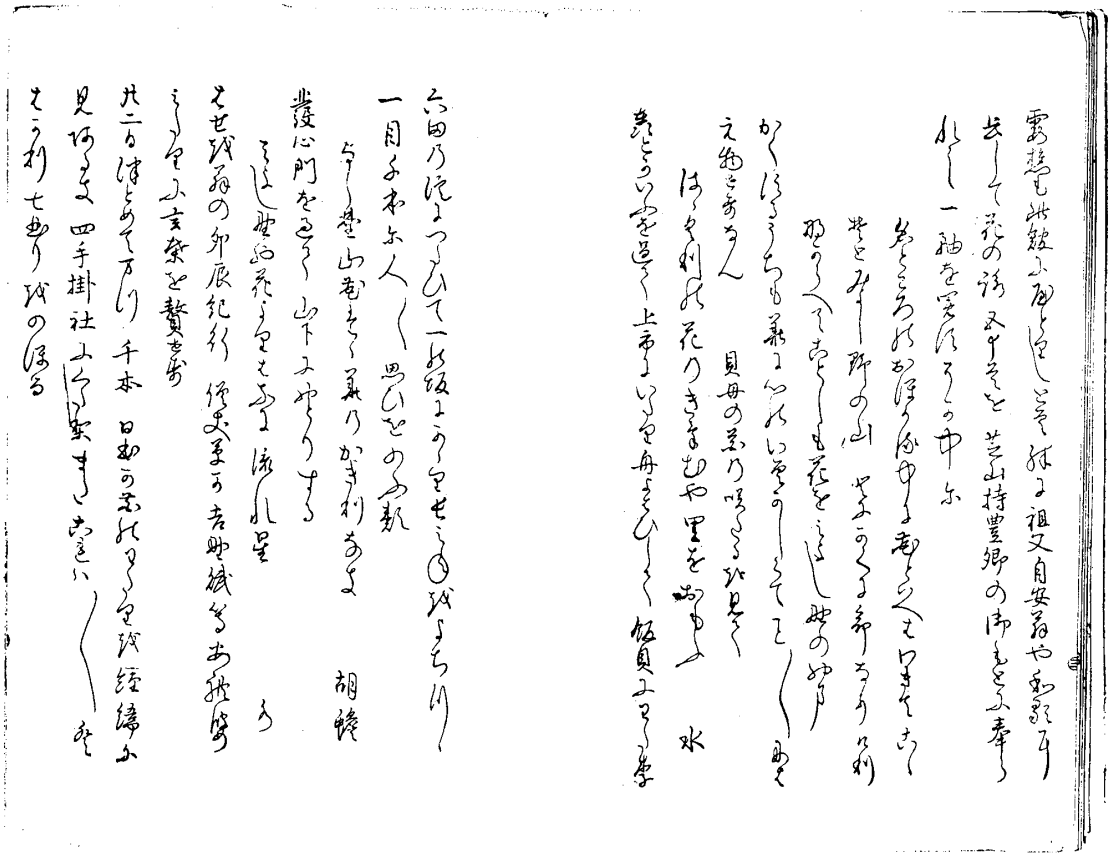
主人の叔父迫間の税主山岡何かしの別荘藤窻にまねかれて春のなかめしは〳〵たり鮮魚霊菓に仙家の思ひをなす

目のまへに梨の花實や窓のもと　舍

藍水あと追來れりと告るまゝ蓬壺亭に帰る

廿一日あるしいへらく年ころ契てし御吉野の芳野よく見せまし塞なから先達せむとて古仙を胡蟾と更て立出る新客三人強力ひとりしりへにつゝきて龍門の滝ハかさねてと見過し平尾村に到る池田氏ハ先達の外家なれは長途のいたはり浅からす往年吾邦の悟心せし韓大季洛の」（三オ）

」（二ウ）



霞樵も此館にやとりしとそ殊に祖父自安翁や和歌に長して花の謠五十首を芝山持豊卿の御もとに奉られし一軸を閲すそか中に

名ところのおほかる中に花といへはわきてこゝ
そとみよし野の山　とにかくに命なりけり
なからへてことしも花をミよし野のやま

かくするうちも華に心のいそかしくてこと〳〵にはえ物せすなん　貝母の花の咲たるを見て

は、くりの花のきけむや里をおもふ　水

轟とかいふを過て上市にいたり舟よはひして飯貝にわたり」（三ウ）

六田の淀につたひて一の坂にか、り長ミねをよちつゝ一目千本に人〳〵思ひをのふる

よし埜山花た、華のかきりなき　胡蟾

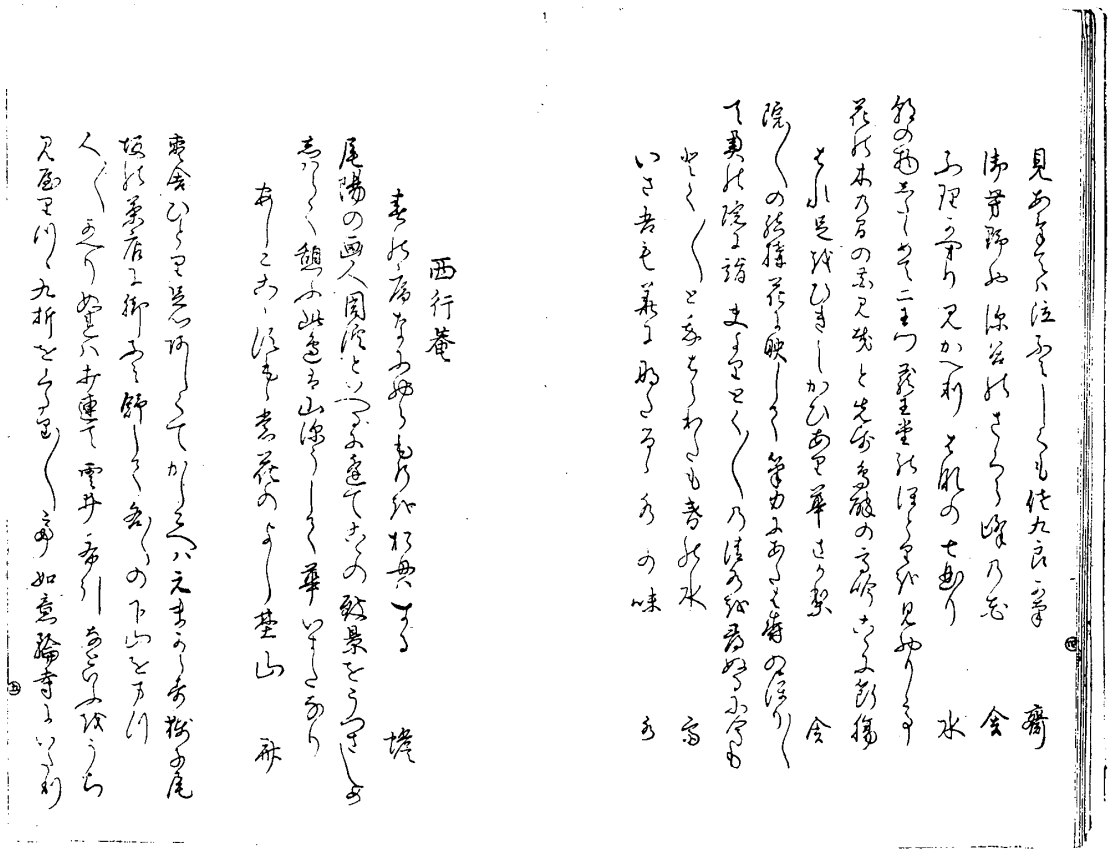
發心門を過て山下にやとりする

ミよし墅や花よりはなに流れ星　水

はせを翁の夘辰紀行僧丈草か吉野賦等あれはミたりに言葉を贅せす

廿二日つとめてまつ千本　日本か花のわたりを経緯に見あるき四手掛社にくたりまたこれハ〳〵とはかり七曲りをのほる

」（四オ）



見あけてハ泣ふミしくもさくらかな　齋
御芳野や深谷のさくら峰の花　舍
ふりかへり見かへりはなの七曲り　水
朝の物した、めて二王門蔵王堂のほとりを見やりて
花の木の間の花見をと先師鳥酔の高吟ここに断腸
はれ足をひきしかひあり華さかり　舍
院〳〵の結構花に映して筆力にあたはすのほり〳〵
て奥の院に詣　夫よりとく〳〵の清水を尋ぬるに今も
とく〳〵と我はらわたも春の水　齋
いさ吾も華になたる、水の味　水」（四ウ）

西行菴

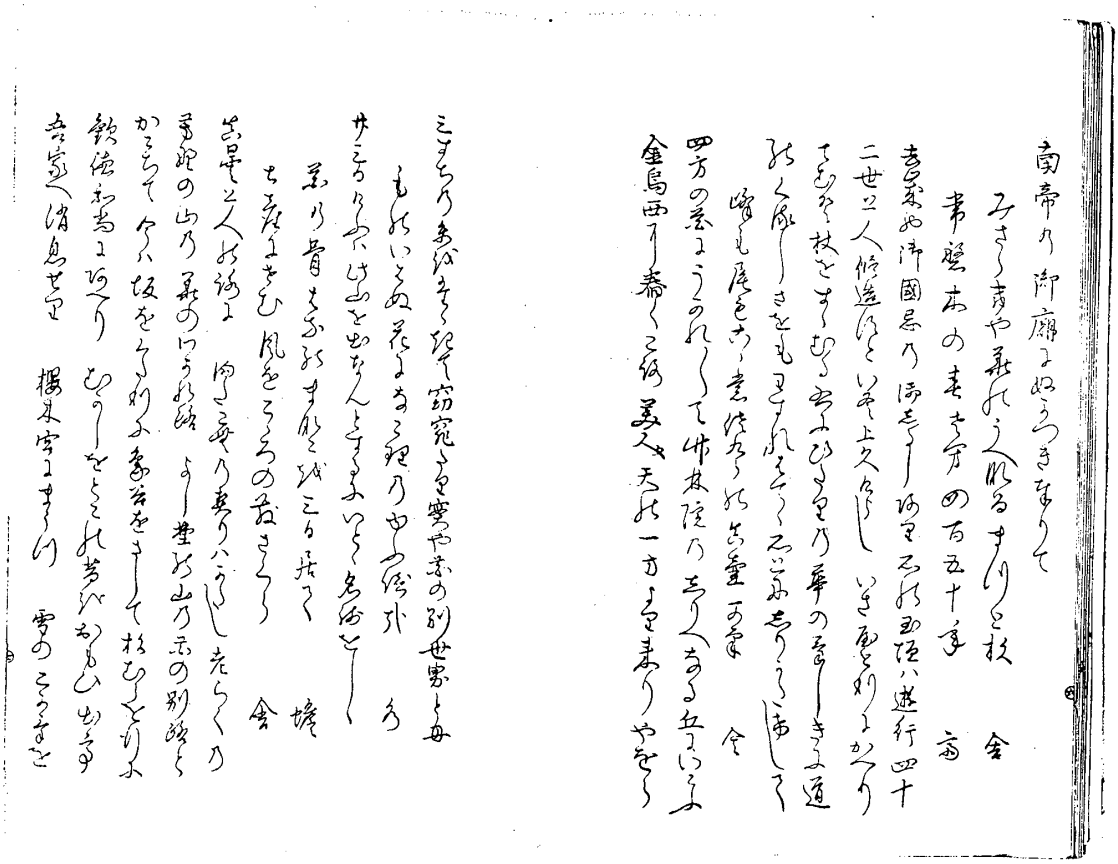
春の庵なにやらものをおもハする　蟾
尾陽の画人周溪といへるに逢てこ、の致景をうつさしめ
しハらく憩ふ此邊は山深うして華いまたなり
あしここ、すも、も花のよし埜山　齋

棗舍ひとり足心あしくてかしこへハえまからす獅子尾
坂の茶店に脚ふミ舒して各〳〵の下山をまつ
人〳〵かへりぬれハ打連て雲井布引なといふをうち
みやりつ、九折をくたり〳〵て如意輪寺にいたり」（五オ）

（周渓筆挿絵）

「（五ウ）

「（六オ）



南帝の御廟にぬかつき奉りて

みさゝきや華のうへなるまつと枕　舍

常磐木の春さへ四百五十年　齋

去歳や御國忌の御しるしあり石の玉垣ハ遊行四十二世上人修造すといと上久けらし　いさやとりにかへりてむと杖をすゝむる右にひたりの華のけしきに道のくるしさをもわすれはて、石上にしりかたけして

峰も尾もこゝもさくらの真壺かけ　舍

四方の花にうかれ〳〵て竹林院のしりへなる丘にいこふ金烏西に春くころ美人天の一方より来りやをら」（六ウ）

ミすちの糸をたゝきて窈窕たり實や花の別世界とも

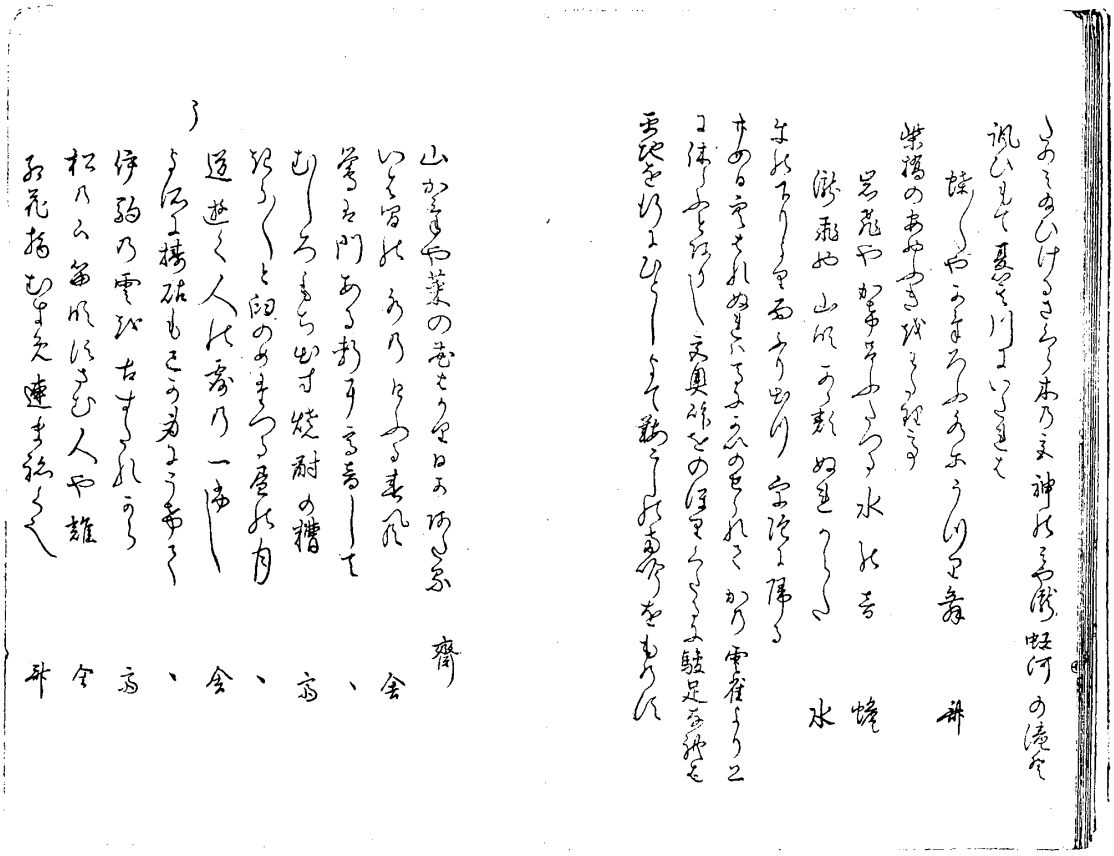
ものいはぬ花になこりのゆふへ哉　水

廿三日けふハ此山を出なんとするにいと、名殘をしく

花の骨はなのまなこを三日ゐて　蟾

土産にせむ風をこゝろの散さくら　舍

真曇上人の謡に　またこむの契りハかたし老らくの芳野の山の華のわかれ路　よし埜の山の花の別路とかこちて今ハ坂をくたりに象谷をさして枕むらを行に歓徳和尚にあへり　むかしをとこの昔をおもひ出て吾家へ消息せり　櫻木宮にまうつ　雪のこかけを」（七オ）



たのミ給ひけるさくら木の宮神のミや瀧虹河の滝と
諷ひもて夏箕川にいたれは

蝶〳〵やかけろふ水にうつり舞　齋

柴橋のあやふきをわたりて

岩飛やかけろふたつる水の音　蟾

瀧飛や山吹か、るぬれからた　水

午の下りより雨ふり出つ　宇陀に帰る

廿四日空はれぬれハ馬にかいのせられてかの雲雀より上
に休らふとありし宮奥峠をのほりくたるに駿足なれは
平地を行にひとしとて鞍こしの両吟をものす　」（七ウ）

山かけや菜の花はかり日かあたる　齋

いは間の水のけふる春風　舎

鶯は門ある軒に高音して、

むしろもち出す焼酎の糟　齋

きら〳〵と臼のめたつる昼の月、

道ゆく人の露の一ふし　舎

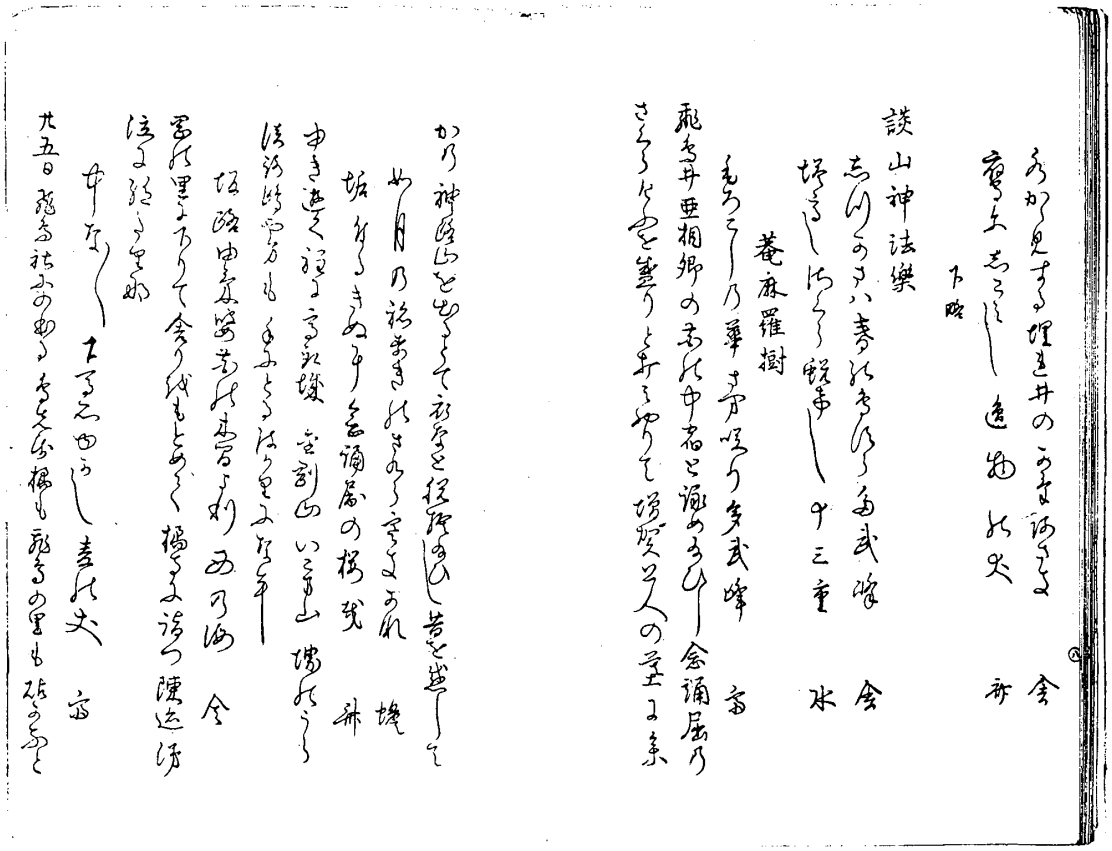
ウ

よそに擣砧も己か身にうけて、

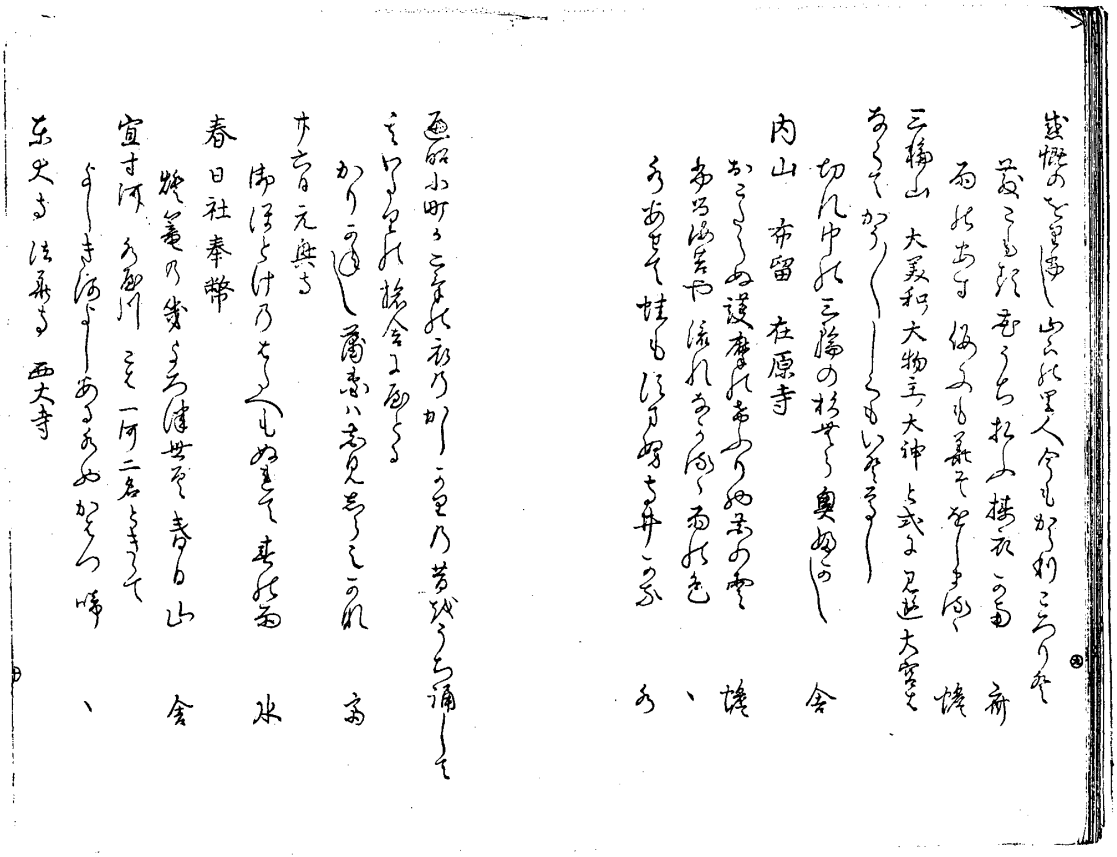
伊駒の雲を古すたれから　齋

松の山笛吹すさむ人や誰　舎

紅花指むすめ連まねく也　齋　」（八オ）

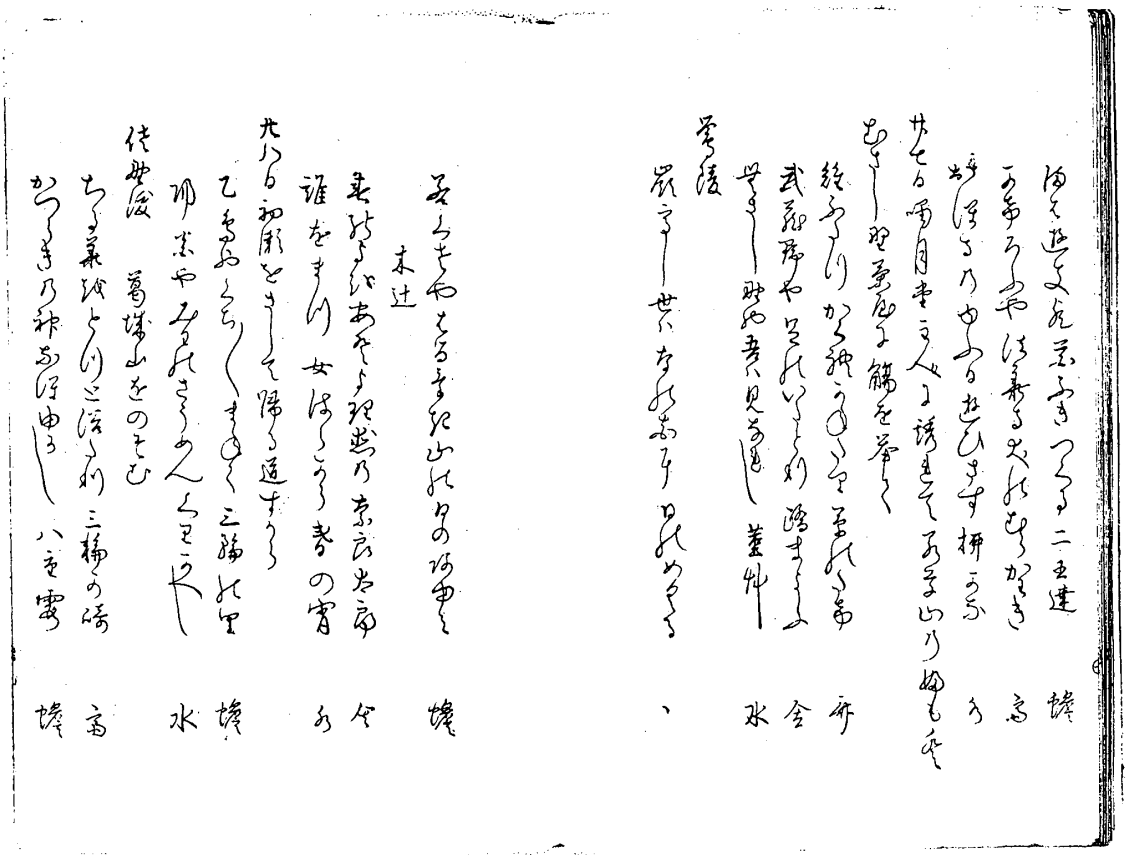


水か、みする埋れ井のかけあさき　舍
鷹にしこミし逸物の犬　齋
下略
談山神法樂
しつかさハ春の鳥すら多武峰　舍
塔高しさくら蜕けし十三重　水
菴麻羅樹
もろこしの華さへ咲り多武峰　齋
飛鳥井亜相卿の花の中宿と詠め給ひし念誦屈の
さくらけふを盛りと打ミやりて増賀上人の墓に参」（八ウ）
かの神路山を出るとて衣なと脱捨給ひし昔を感して
如月のねすきのさくら寒きかな　蟾
垢付るきぬに念誦屈の桜哉　齋
ゆきゆく程に高取城　金剛山　いこま山　堺のうら
淡路嶋やまも手にとるはかりになむ
坂路ゆけは花の木間より西の海　舍
岡の里に下りて舍りをもとめて橘寺に詣つ陳迹涕
泣に絶たりな
中な〳〵下馬石ゆかし麦の丈　齋
廿五日飛鳥社にのほる鳥先師橘も飛鳥の里も砧かなと」（九オ）



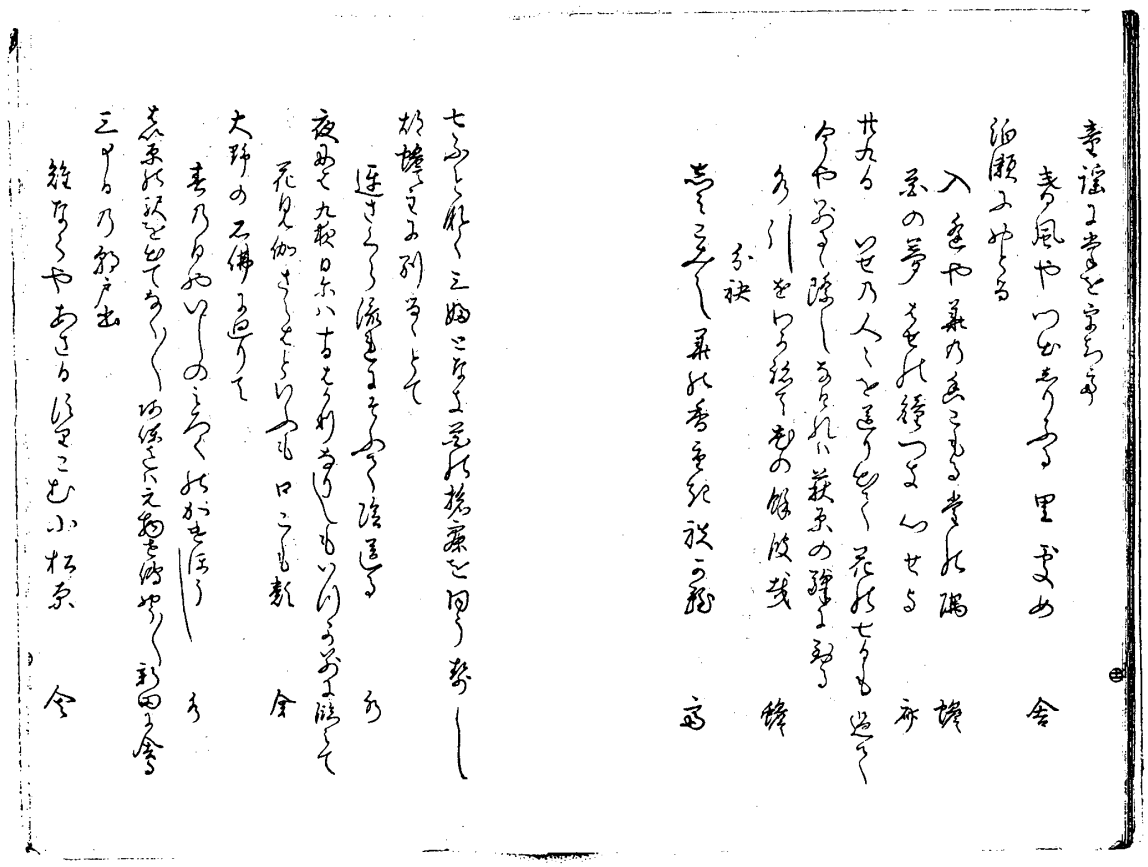
感慨のをりふし山下の里人今もからりころりと
散こもる花うち払ふ擣衣かな　齋
雨のあす假にも華そをしまる、　蟾
三輪山　大美和ノ大物主ノ大神と式に見ゆ大宮は
なくてかう〳〵しくもいと尊し
切凧の三輪の枕むら奥ふかし　舍
内山　布留　在原寺
おこたらぬ護摩のけふりや華の雲　蟾
布留海苔や流れなかる、雨の色　、
水あせて蛙もすまぬ寺井かな　水」（九ウ）

遍昭小町かこけの衣のかしかりの昔をうち誦して
其わたりの旅舍にやとる
かりかねし蒲團ハ花見しらミかな　齋
廿六日元興寺
御ほとけのはたへもぬれて春の雨　水
春日社奉幣
燈篭の幾よろつ世そ春日山　舍
宜寸河　水屋川　こは一河二名ときゝて
よしき河よしある水やかはつ啼　、
東大寺　法華寺　西大寺」（十オ）



まはゆき歟花ふきつくる二王達　蟾
かけろふや法華寺犬のむらかわき　齋
おほ寺のゆふ日ゆひさす柳かな　水
廿七日嘯月堂主人に誘れて若草山のふもと
むさし野茶屋に觴を挙て
雉ふたつかくれかねたり草のたけ　齋
武蔵野や足のいたとり踏まよふ　舍
むさし野や吾ハ見なれし菫艸　水
鶯陵
嶺高し世ハなの花に日のめくる　、」（十ウ）

若くさやはるけき山の日のあゆミ　蟾
木辻
春のよをあとより恋の奈良太郎　舍
誰をまつ女はらから春の宵　水
廿八日初瀬をさして帰る道すから
乙鳥やくちくまねて三輪の里　蟾
帰花やみわのさうめんくりかへし　水
佐野渡　葛城山をのそむ
ちる華をとつと浴たり三輪か崎　齋
かつらきの神なほゆかし八重霞　蟾」（十一オ）



童謡に掌をうちて

春風や門出しりふる里處女　舍

泊瀬にやとる

入逢や華の香こもる堂の隅　蟾

花の夢はせの鐘つき心せよ　齋

廿九日　いせの人々を送り出て花の七日も過て

今や別る、際しなりなは萩原の驛に到る

水引をわかねて花の餘波哉　蟾

分袂

しミこみし華の香重き袂かな　齋」(十一ウ)

七ふとなく三ふとなき花の旅寐を同うせし

胡蟾主に別る、とて

遅さくら流れにそふて陰送る　水

夜には九夜日に八十日はかりなりしもいつか別に臨ミて

花見伽さらはといふも口こもる　舍

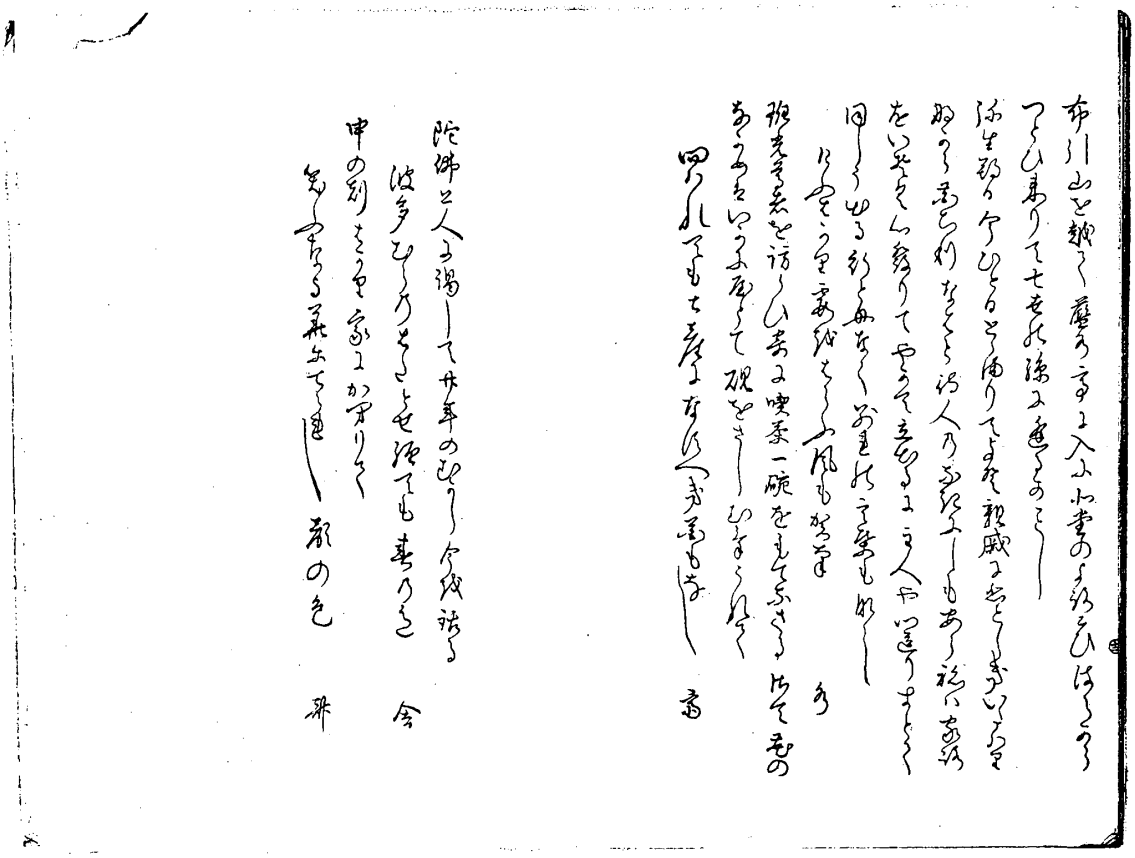
大野の石佛に廻りて

春の日やいしのミろくのかけほうし　水

はい原の駅を出てなく〳〵阿保迄はえ物せてやう〳〵新田に舍る

三十日の朝戸出

雉なくやあさ日すりこむ小松原　舍」(十二オ)



布引山を越て藍水亭に入に北堂のよろこひはらから
つとひ来りて七世の孫に逢るかことし
弥生朔日今ひと日と、まりてよと親戚にひとしきいたハり
なから花ちりなはと待人のなきにしもあらねハ家路
をいそく心發りてやかて立出るに主人や門送りすとて
同しう出る行ともなく別れの言葉もなし

けふはかり霞をはらふ風もかな　水

班光尊者を訪らひ寄に喫茶一碗をもてなさるさて花の
なかめはいかにやとて硯をさしむけられて

問ハれても土産になすへき花もなし　齊」(十二ウ)

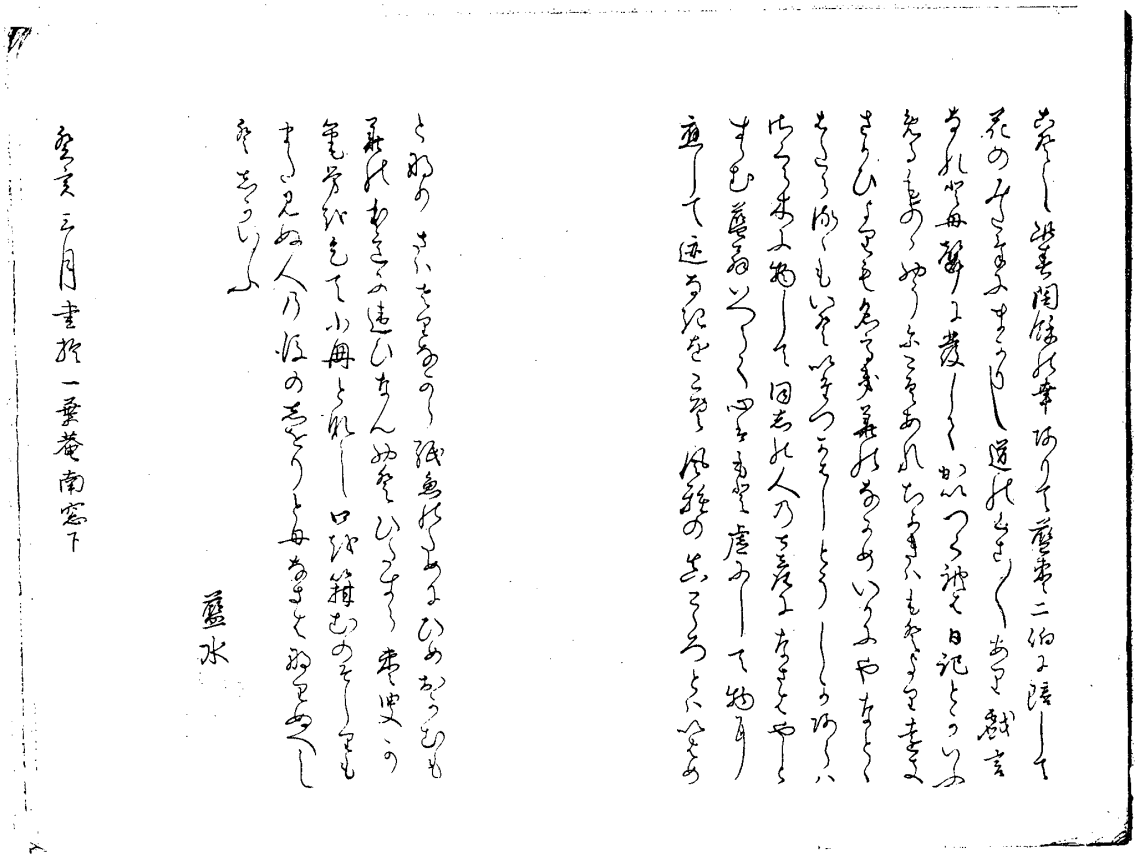
陀佛上人に謁して廿年のむかし今を語る

波多むらのはたとせ経ても春の道　舎

申の刻はかり家にかへりて

笑ふなよ華にてられし顔の色　齊

」(十三オ)



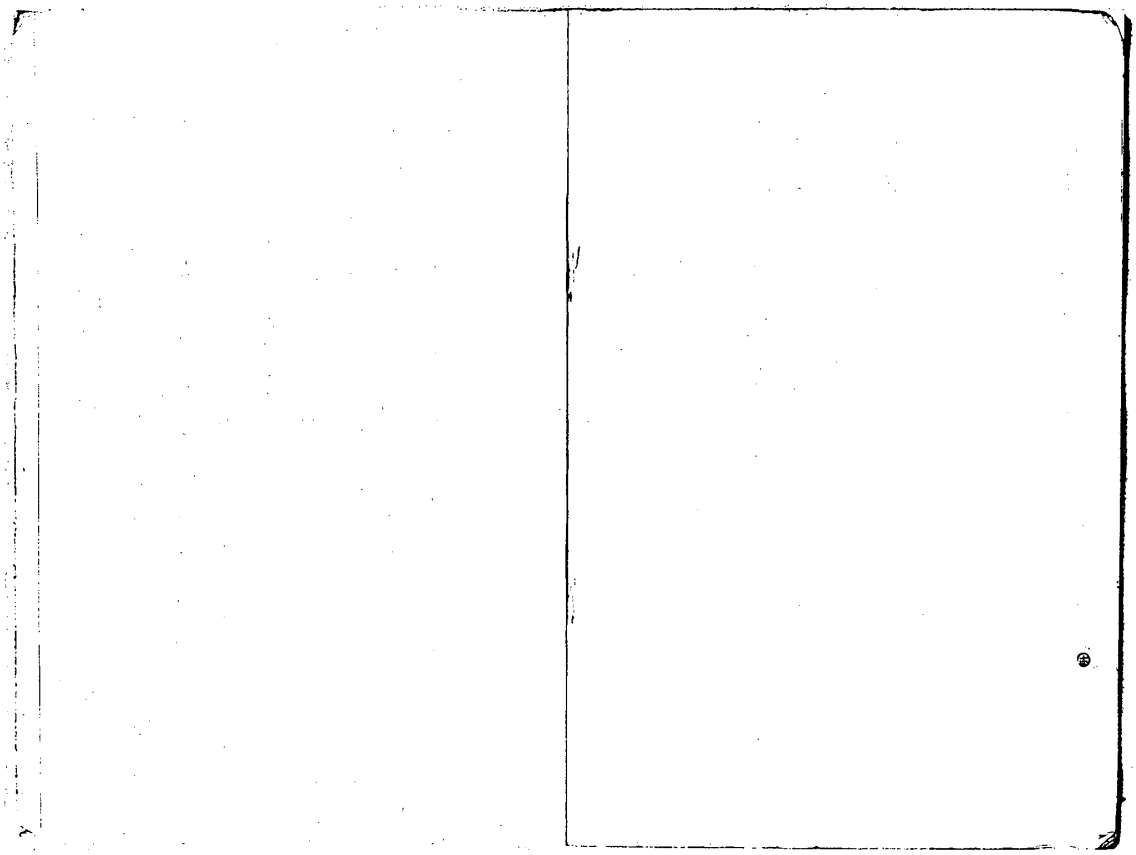
ことし此春閏餘の幸ありて藍棗二伯に陪して花のみたけにまかりし道のくさ〳〵あり戯言なれとも聲に發してかいつくれは日記とかいふめるもの、やうにこそあれちかきハもとより遠きさかひよりも名高き華のなかめいかにやなと、はたらるゝもいといたつかはしとそしかあらハさくら木に物して同志の人の土産になさはやとすらむ藍翁いへらく心はもと虚にして物に應して迹なきをこそ風雅の真こゝろとハいはめ」(十三ウ)

となりさハさりなから紙魚のためにひめおかむも華の本意に違ひなんやとひたすら棗叟か筆労を乞て小冊となし口を箝むのそしりもまた見ぬ人の後のしをりともなさはなりぬへしとしかいふ

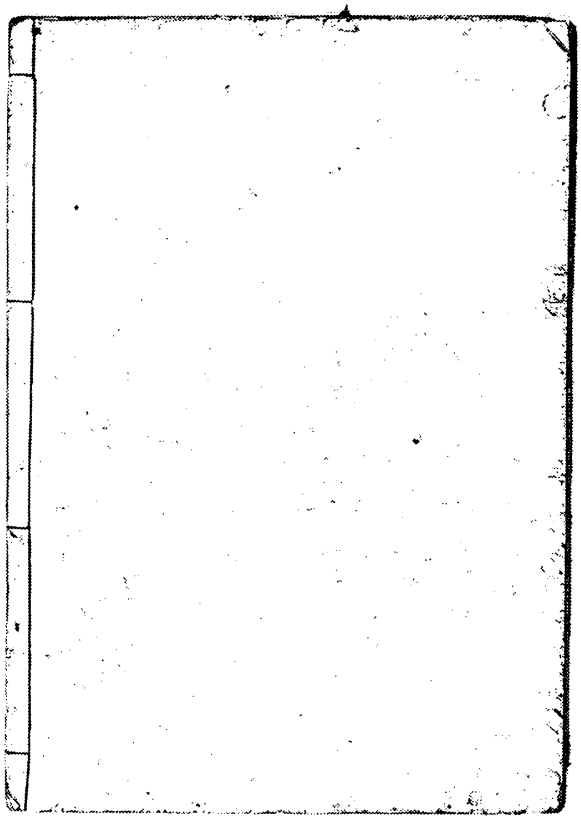
藍水㊞

癸亥三月書於一葉菴南窓下

」(十四オ)



」（十四ウ）



（裏表紙）